

不登校 (13歳)



はじめ

中学1年生になったAくんは2学期が始まった頃から朝起きるのがきつくなり、だんだん学校に遅刻するようになりました。保健室で休む時間が増え、そのうち学校を休むようになってしまいました。

気づき

ある日、Aくんのところに、担任の先生と養護の先生が心配してきてくれました。養護の先生から「夜眠れている?」「ご飯は食べれてる?」と質問され、Aくんは自分の生活リズムがすっかり乱れてしまっていたことに気づきました。でも、どうやって治したらいいのか分かりません。そのとき、養護の先生から「一度小児科の先生に相談してみたらどうかな?」と提案されました。

つなぐ1

1週間後、Aくんはお母さんと一緒に小児科に受診しました。病院に行ってみると意外と話がやすく、中学校に入学してから宿題と部活に追われて、睡眠時間が足りなくなっていたことなどが分かってきました。小児科の先生は「焦らなくていいよ、まずは生活リズムを整えて、学校に戻る方法を一緒に考えよう」と言ってくれました。一方、Aくんのお母さんも、学校に行けないAくんを見て、自分の育て方が間違っていたんだと、すっかり自信をなくしていました。毎朝学校に「休みます」の電話をするのが辛くて、お母さんも食欲がなくなっていました。そこで、小児科の先生はお母さんに「スクールソーシャルワーカー(SSW)」という人を紹介してくれました。SSWさんが学校の先生や病院の先生に状況を伝えてくれるので、同じことを何度も説明する必要がなくなり、ずいぶん負担が減りました。また、お母さんが相談しやすいように、心理士さんのカウンセリングも受けられることになりました。実はお母さん、Aくんのことを誰にも相談できていなかったのです。

お母さんが少し元気になってきた頃から、Aくんも朝起きられるようになって、時々お父さんと散歩するようになりました。SSWさんがAくんや家族と病院、学校の間に入って、小児科の先生はAくんが疲れすぎないペース配分、担任の先生は自習方法を提案してくれました。家で自習時間を持てるようになったAくんでしたが、学校を半年以上休んでいたため、自分が学校に行きたいのか行きたくないのか、よくわからなくなっていました。そこで、学校ではなく適応指導教室から挑戦することになりました。

つなぐ2

適応指導教室にはいろいろな子がいました。週1回だけくる子、来ても疲れて休憩している子、スクールカウンセラー(SC)に悩みを相談している子……。Aくんも少しずつ、自分のペースを身につけられるようになりました。ついつい頑張りすぎて体調を崩すのがAくんの悪い癖だと気づいたのです。自分のペースを見つけたAくんは、3年生から地元の中学校に戻ってみることにしました。ダメだったらまた適応指導教室に行かせてもらえばいい。そんな逃げ道はAくんにもAくんのご両親にとっても、大きな支えになりました。

その後

3年生から地元の中学校に戻ったAくん、体育祭の後で疲れて休んだり、試験のプレッシャーで体調を崩したりしたこともありましたが、休んでもまた体調を戻して学校に行けるという自信を少しずつつけて、無事に中学校を卒業することができました。ご両親もそんなAくんを見守って、少しずつ子育ての自信を取り戻しています。

連携する職種と部署

- 職種** ・担任の先生・養護教諭⁷⁶・小児科医⁷⁰・スクールソーシャルワーカー⁷⁶
・心理士⁷²・スクールカウンセラー⁷⁶
- 部署** ・小児科病院⁸⁰・適応指導教室⁸⁶

いじめ (13歳)



はじまり

中学1年生のFは、登校するかどうかが迷っていました。「F! 早く学校に行きなさい! 遅刻するわよ!」、母親が台所から叫んでいました。Fは渋々身支度をしながら眩きました。「母には言えない…。僕がいじめられていること。」毎日、廊下で体当たりされ、知らない間にノートには「キモイ」と落書きをされている。どうして僕が…。

気づき

はじめの頃は、クラスメートBひとりからの嫌がらせでしたが、次第に2人、3人と、集団でからかわれることが多くなりました。上履きが隠され、ノートが破られ、椅子の上に押しピンが置いてあることもありました。Fは“きっと僕が悪いんだ。いじめられる原因は僕にある。僕の性格が暗いから…”と自分を責めるようになりました。“誰か助けて…どうしたらいいんだ…もう限界だ。”そんなとき、Fがいじめを受けていることを見ていたクラスメートのE子は悩んでいました。“誰かが伝えないと。いじめの事実を大人に相談しないと。”

つなぐ1

担任教諭は、E子に言いました。「ありがとう。あなたの勇気に先生は感謝します。F君がいじめられていることを教えてくれて。後は私たち大人がしっかりとF君を守るから」。E子は自分が先生に伝えたことで逆にいじめられないか悩みましたが、勇気ある行動を認められ安心しました。担任教師はスクールカウンセラー(SC)と一緒に対応を考えました。緊急性があること、Fには相談をする相手がないことが確認され、2人で面談をすることになりました。最初、Fはいじめられていることを否定していましたが、先生たちからFは一切悪くないこと、自分を責める必要はないこと、いじめられていた事実を人に話すことは恥ずかしいことではない

ことなどを告げられて、Fは中学校入学以来つらい思いをずっとしてきたことを少しずつ話してくれました。

つなぐ2

いじめ対策防止推進法にのっとり学校長は校内委員会を立ち上げて、全教職員が共通認識をもち、Fを守っていくことが話し合われました。Fの了承を得た後に、校長、教頭、担任、SC同席のもと、保護者が学校に呼ばれて話し合いがもたれました。いじめられていることを両親に知られるのが恥ずかしかったこと、両親に申し訳なく思っていたことなどがFから両親に伝えられました。両親は子どもがいじめ被害を受けていたことに憤りを感じつつも、Fに「勇気を出して教えてくれてありがとう。父さんも母さんも気づかなくてすまなかった。お前が正直に話してくれたことをとても嬉しく思う。」と伝えました。

その後

学校長は今回のことを契機に、学校医を招き、「いじめが児童生徒に与えるところへの影響について」の勉強会を企画し、全職員で拝聴しました。いじめ体験は将来トラウマ(外傷体験)として本人が思い出して不安になることがあり、いじめ案件に気づいたときには、然るべき対応を確実に実施していくことが、その子の将来のために大切であることが伝えられました。学校側は今、いじめ加害者とその家族とも面談を行い、加害者から被害者への謝罪にもっていくようにすすめています。

連携する職種と部署

職種 ・ 担任の先生 ・ スクールカウンセラー⁷⁶ ・ 学校長 ・ 学校医⁷⁷

腹痛・頭痛 (14歳)



はじめ

A子は小さい頃、発表会などの緊張する場面や、楽しみにしていた行事の前にはお腹が痛くなって参加できなくなることがしばしばありました。A子のお母さんは、かかりつけの小児科の先生に相談して、整腸剤を処方してもらっていました。小児科の先生は、いつも「緊張してお腹が痛くなる子は多いよ」と話して、お母さんを安心させてくれました。でも、小学校に入ってからはいくつかのことが減り、お母さんも喜んでいました。

A子は中学に入ってバスケットボールを始め、勉強と部活に頑張っていました。成績は良好で、部活もレギュラーに手が届きそうでした。2年生の夏休み、頑張って練習に取り組んでいたのですが、熱中症で倒れ、病院に運ばれました。翌日からA子は頭痛で動けなくなりました。お母さんは心配してA子を近くの脳神経外科に連れて行きました。頭部MRI検査を受けましたが、とくに異常はないといわれ、鎮痛薬を処方されました。しかし頭痛はおさまらず、9月になってもA子は全く登校できません。担任の先生が心配して自宅を訪問したとき、A子は「明日からは頑張る」と約束しましたが、翌日も登校できず「約束しただろう!」と叱責する担任を前に、布団を被って泣きだしてしまいました。お母さんはどうしたらいいのかと困り果て、小さい頃にかかっていた小児科の先生に相談に行きました。

気づき

お母さんは、これまでの経過を話し「脳外科では異常はないといわれ、担任の先生とも約束したのに学校に行けないなんて、さぼりなんでしょか」と訴えました。そのとき、小児科の先生は優しい口調で「A子は学校をさぼるような子どもではないと思います。本当に頭が痛くて辛いのは?この年頃の頭痛には起立性調節障害という病気が隠れていることが多く、それが熱中症で悪化することもあります。病院で検査をしてもらいましょうか」と話し、総合病院の小児科に紹介してくれまし

た。「さぼりじゃない」と言ってもらえてA子は気持ちが少し楽になりました。

つなぐ1

A子は病院小児科で起立試験をして起立性調節障害と診断されました。病院の先生は「身体的に無理をしたり、ストレスが強かったりすると症状がひどくなるよ」と教えてくれました。A子は「夏休み明けのテストに向けて遅くまで勉強していたし、部活もレギュラーになりたいからと頑張っていたからかなあ」と思いました。先生は「薬を飲みながら、調子に合わせて少しずつ動けば大丈夫だから、養護教諭の先生と相談して保健室登校させてもらうようにしよう」と言って学校に連絡してくれました。

つなぐ2

校長、担任、養護教諭の先生が病院に来て病院の先生から話を聞いてくれました。学校の先生方はA子の状態を理解し、状態に合わせて短時間・別室登校することを認めてくれました。A子は頭痛が軽くなるお昼頃から登校し、保健室で過ごすようになりました。担任や校長先生が勉強を教えてくれるときもありました。スクールカウンセラーとも話す機会があり、A子は「小さい頃、お腹が痛くなって親をがっかりさせることが多かったから、少しでも褒めてもらえるように頑張りすぎているのかもしれない」ということに気づきました。スクールカウンセラーはお母さんとも話して、そのようなA子の気づきを伝え、お母さん自身の不安を和らげてくれました。

その後

A子は少しずつ学校にいる時間を増やし、教室にも入るようになりました。そうするうちに頭痛は少しずつ軽くなり、3年生になる頃には普通に登校できるようになりました。

連携する職種と部署

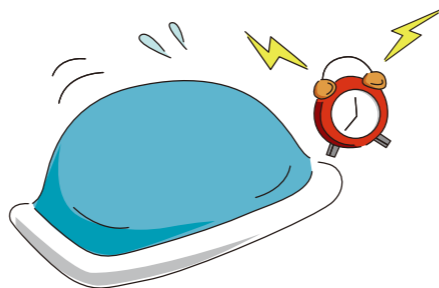
職種 ・ 小児科医⁷⁰・ 養護教諭⁷⁶・ 学校長 ・ スクールカウンセラー⁷⁶

部署 ・ 小児科病院⁸⁰

連携症例ファイル #18

朝起きられない

(14歳)



はじまり

〇子は中学2年生。5月連休明けから、朝に起きてこないで、母親が起こしていました。目がなかなか覚めずに、起こしても起き上がれず、1時間ぐらいその状態が続いたので、しばしば遅刻するようになりました。翌日も朝起きれず、朝食もとらずに遅刻しました。午前中は頭痛が強く、授業でもボーとする、足が重い、むかむかするなどがありますが、午後からは頭痛も軽くなり、放課後はクラブ活動への参加も可能で、帰宅後も元気でした。そのような状態が2週間ほど続きましたが、帰宅後は元気で食欲も良かったので、病院には受診しませんでした。

気づき1

6月になり、学校の廊下で立っている時に気を失って倒れて保健室に運ばれました。保健室で1時間ほど休んでいると元気になったので、教室に戻ろうとして立ち上がったときに、目の前が暗くなり立ちくらんでまた倒れてしまいました。横に養護教諭がいたので、すぐにベッドに寝かせてもらいました。養護教諭は、起立性調節障害でないか、と思いました。

つなぐ1

保護者に連絡して、医療機関を受診するように伝えたと、何科を受診したらいいのか」質問を受けて、養護教諭はすぐに学校医に相談したところ、小児科医をすすめました。翌日、小児科クリニックを受診しました。診察の結果、起立性調節障害を疑った医師は、日本小児心身医学会編、起立性調節障害診断治療ガイドラインに沿って、基礎疾患の除外のために血液検査、尿検査、心電図検査を行いました。後日、日を改めて、新起立試験を実施したところ、起立直後の血圧回復が悪く、立ちくらみも強く認めました。前回の諸検査で異常はないことから、起立性調節障害のサブタイプである起立直後性低血圧と診断しました。水分

摂取の励行、歩行トレーニングなどの運動療法、睡眠リズムの修正と、薬物療法をすすめてくれました。

気づき2

しかし〇子が夜になかなか寝付けない、と訴えました。医師は起立性調節障害は心身症と知っていたので、心配事や学校で気になっていることがあるのでは、と考えて、子どもに質問したところ、うつ向き黙っていました。それを見た保護者が、『最近、感情の起伏が激しい、勉強のことが気になる、友達ともうまく行かないようだ、でも我慢強い子どもでもあまり話したくない』と言いました。

つなぐ2

心理的ストレスが関与していると気づいた医師は、子どもと保護者へスクールカウンセラーと面談するようにアドバイスしました。〇子は面談で『このまま午前中に動くことが出来なければ、高校進学が不安です。遅刻するので友達が仲間外れにしようとしています。』など不安を吐露しました。報告を受けた担任教諭は、全日制高校以外にも定時制・通信制高校があること、クラスメートにも起立性調節障害について説明し理解を求めるなどの対応を行いました。

その後

学校側の適切な対応があり、午後から登校することで〇子の気持ちは穏やかになりました。また治療に前向きに取り組んだことで、起床時間も徐々に早まり、1か月後には症状も改善、毎日学校にでてきて、遅刻も少なくなり、体調が回復しました。引き続き小児科クリニックに受診を続けています。

連携する職種と部署

職種 ・ 養護教諭⁷⁶・ 学校医⁷⁷・ 小児科医⁷⁰・ スクールカウンセラー⁷⁶

・ 担任の先生

部署 ・ 小児科クリニック⁸⁰

摂食障害 (14歳)



はじめ

Aさんは中学生。両親と小学6年生の妹と4人暮らし。陸上部に入部、長距離が得意でした。勉強も優秀で学年トップ。周りから一目置かれる自分が誇らしく思えました。中学2年の夏休み、顧問の先生から「太くなったからタイムが伸びない」と言われたので、友だちとダイエットを始め、月に2kg以上も減ったので達成感を感じました。冬の大会を前に体重は10kg減りましたが、体がだるく思うように動けません。しかし、「もっと痩せたい」と思うのでした。

気づき

Aさんの変化に気がついたのは、家族ではありませんでした。3学期、給食をほとんど残しているのに担任が気づき、養護教諭と部活顧問に相談しました。養護教諭は、体重曲線をチェック、保健室でAさんと身体と気持ちについて面談しました。著しい痩せ、体温が低く、心拍40回/分、3か月前から月経がありません。それでも早朝5km走ってから登校しています。養護教諭と担任は摂食障害の可能性があることを家族に伝えるべきと判断し、母親へ連絡しました。

つなぐ1

校長、養護教諭、担任、スクールソーシャルワーカー、部活顧問が同席してAさん・母親と面談しました。「摂食障害の疑い」と聞いて、Aさんも母親も動揺しました。母親は「確かに痩せたとは思いましたが、もともと、ぽっちゃり体型だったので、ダイエットするのは普通だから危険性は感じなかった」と言いました。しかし、Aさんは「摂食障害」の病魔に蝕まれていました。病院受診を勧めると「私は病気じゃない」とひどく怒り拒否しました。「学校を休みたくない」「陸上の練習を続ける」というのです。何とかAさんを説得し、幼稚園時代から受診しているかかりつけの小児科クリニックを受診することになりました。

つなぐ2

小児科医は丁寧に内科的な診察をしました。血液や尿検査も実施し、水分が足りないこと、栄養が不足したために肝臓の機能が悪いことが明らかになりました。1日400kcalしか摂れなくなった現状では、専門病院で身体と心の治療を受けるべきと判断し紹介してくれました。専門病院では、身体は小児科医、心は精神科医が主に受けもち治療が始まりました。3か月間の入院が必要でした。入院初期は経口で食事がまったく摂れず点滴と経鼻胃チューブからの栄養剤注入を行いました。体重が増えて元気に活動ができるまで、行動制限療法を受けました。体重が増えないと行動が許されず辛い日々でしたが、看護師、栄養士や心理士の支援もあって徐々に体重は回復しました。主治医は、「退院後が一番大切だよ」と言いました。

その後

退院後の登校は2時間程度から、体育や大好きな陸上部の活動はできません。中学3年ですから受験勉強も気になります。スクールカウンセラーと定期的に相談を行うようになりました。病院、学校、家族が連携してAさんを見守ってくれて、徐々に普通の学校生活へ復帰できました。

連携する職種と部署

- 職種** ・担任の先生・養護教諭⁷⁶・学校長・スクールソーシャルワーカー⁷⁶
・小児科医⁷⁰・精神科医⁷⁰・看護師⁷³・栄養士⁷⁴・心理士⁷²
・スクールカウンセラー⁷⁶
- 部署** ・小児科クリニック⁸⁰